日本語・日本事情教育部門

１．日本語研修コース及び日本語研修特別コース

２．短期留学プログラム日本語コース

３．全学向け日本語コース

４．日本語能力試験対策講座

５．共通教育科目・日本語日本事情科目

１．日本語研修コース及び日本語研修特別コース

《全体概要》

2010年度、日本語研修コースでは、教員研修留学生４名を受け入れた。本コースの目的は、日本で生活する上で必要な日本語力及び研究を行う上で必要な基礎的な日本語を習得することである。文型・文法10コマ（１コマ：90分）を基本として、会話、漢字、作文、情報処理、文化、修了発表指導の各技能クラスがある。コース修了時の修了発表会では、各学生がスライドを用いて日本語によるスピーチを行う。修了発表における各受講者のスピーチのテーマは以下の通りである。

＜10期 2010年度後期＞

わたしの学校―Tambo 小学校―	レイシェル・ルセロ・モヒカ（フィリピン）
小学校の先生の仕事	アビラ・ノベリア・カリナオ（フィリピン）
教師の仕事－人づくりで国づくり	ガラガテ・マリー・グレース・ブイコ（フィリピン）
わたしのしごと	エイ・モン・ティン（ミャンマー）

《時間割表》

	月	火	水	木	金
1	日本語 （文型・文法）	日本語 （文型・文法）	日本語 （文型・文法）	日本語 （文型・文法）	日本語 （文型・文法）
2	日本語 （文型・文法）	日本語 （文型・文法）	日本語 （文型・文法）	日本語 （文型・文法）	日本語 （文型・文法）
3	日本語 （情報処理）	日本語 （作文）	日本語 （漢字）	日本語 （会話）	日本語 （修了発表指導）
4			日本語 （文化）		

以下に、各クラスの概要をまとめる。なお2010年度、日本語研修特別コースは開講されなかった。

《日本語（文型・文法）》

【受講者】４名（非漢字系４名）　【授業時間】10コマ／週　総コマ数：132コマ

【担当教員】桑原陽子（コーディネータ）・澤崎幸江・敷田紀子

１）目標

留学生活を送る上で必要な基礎的な日本語を習得する。（『みんなの日本語初級』第１～25課）

２）方法

（１）授業の進め方

・　１限目のみ、全学日本語コース「日本語Ｉ」と合同であった。１限で『みんなの日本語初

級』の導入・学習を行い、２限では１限の学習項目の定着を図った。原則として２日（４コマ）で、１課を終了した。１限の学習内容については、全学日本語コース「日本語1」を参照されたい。

・　２限目では、語彙クイズ、文型作文、文ディクテーション、中作文を継続して行い、学校・教育関係の語彙の定着を目指した練習を数多く取り入れた。後半はロールプレイや、自国での教師生活に関わるトピックについてのディスカッションを行うなど、話す動機を高める工夫をした。

（２）成績・評価

中間テスト（15%）と期末テスト（85%）で、最終成績60点以上を合格とする。合格者は、来期、全学日本語コース日本語Ⅱを、不合格の者は、同コース日本語Ⅰを受講する。

３）評価と課題

・　全学日本語コースとの合同授業では、活発な練習活動が実施できた。

・　修了発表を意識し、学校・教育関連語彙の拡充を図る練習は非常に有効であった。

・　『みんなの日本語初級』25課までの学習で修了発表に必要な文型をどのように補充するかが、今後の課題である。

（桑原陽子）

《日本語（情報処理）》

【受講者】４名　【授業時間】1コマ／週　総コマ数：13コマ　【担当教員】桑原陽子

１）目標

Microsoft word と power point の基本的な使い方を学び、修了発表の資料を作成する。

２）方法

情報処理センターの端末を使用し、Microsoft word と power point の使い方を学習した。教材は、担当教員作成のプリントである。修了発表資料を評価対象とした。

３）評価と課題

自国でのＰＣ操作経験が豊富な学習者が多かったので、スムーズに学習が進められた。

（桑原陽子）

《日本語（漢字）》

【受講者】４名（非漢字圏４名）

【授業時間】１コマ／週　総コマ数：13コマ　【担当教員】山中和樹

１）目標

教科書『みんなの日本語初級Ⅰ　漢字　英語版』を使用して、漢字の読み方、書き方を学ぶ。教科書ユニット１～10の112漢字、161漢字語を習得する。

２）方法

（１）授業の進め方

・　原則として１コマ１ユニットで進んだ。ただし、最初の２コマで漢字の識別、成り立ち、

ベーシックストロークについて学習した。３コマ目から10～14字ずつ漢字を学習した。

・　授業では、漢字の成り立ちから説明し、テキストの漢字の読み・書き練習を行ったが、画数の多い漢字はもっぱら読みの練習を行った。

（２）復習クイズ

・　毎回、漢字フラッシュカードを使用し、学習済みの漢字の読みを繰り返し復習した。その直後に、各ユニットの復習クイズを実施した。主に文中における漢字語の読みをひらがなで書く問題を出題したが、数と数に関連する語の漢字の書き問題も出題した。

（３）成績・評価

・　毎回のクイズ（20%）＋ 期末テスト（80%）をもとに総合的に評価した。

３）評価と課題

・　参加学生４名はすべて非漢字圏であったが、いずれも漢字に興味を持ち、積極的に漢字学習に取り組み、毎回のクイズでも十分満足のいく結果が残せた。ユニット10までの基本的な漢字の読みはほとんど問題がなく、無事にコースが終了できた。　（山中和樹）

《日本語（作文）》

【受講者】４名（非漢字圏４名　フィリピン３名　ミャンマー１名）

【授業時間】１コマ／週　総コマ数：13コマ　【担当教員】今尾ゆき子

１）教科書および授業の目標

・　ハンドアウト（単文作成問題、モデル文、関連語彙等）

・　５つの課題を設定し、課題作文をもとに修了発表のためのレポートを作成する。

２）方法

（１）授業の進め方

・　授業の始めに修了発表のテーマを大まかに決めて、課題作文の集大成が修了発表および修了レポート作成の基盤となるように、５つの課題を設定した。

・　修了レポートは冬休みまでに作成する必要があるが、授業時間数の不足から今期はＱ＆Ａ方式の単文作成練習を十分行うことができなかった。

・　モデル文を参考に文章作成の練習を行い、課題作文はワープロ打ちで宿題とした。

・　課題作文はメールで添削。次回の授業で各自が文章を読んで、内容把握と表現や誤字の修正を行った。

・　第９回目（冬休み前）までに５つの課題作文をまとめて修了レポートを作成し、１月から個別指導。

・　課題作文　１．自己紹介／　２．わたしの学校（１）（２）／　３．学校の行事
　　４．わたしのしごと（１）（２）／　５．わたしの国・わたしの町

（２）成績・評価

課題作文（50%）＋ 修了レポート（50%）

３）評価と課題

・　出席は４名とも皆出席。授業態度も良好。
・　文型・文法クラスが全学向けコースの日本語Ｉと合同授業となったため、４つの課題作文を終える12月初めに、文法クラスではようやく「て形」の導入に至る状況下にあって、作文で使用する文型が限られた。さらに、今期の学生は既習文法・語彙の定着が不十分であった。その結果、作文の授業では最初の５回まで、単語だけを記載する表の作成に専念せざるを得なかった。
・　既習漢字がほとんど読めず、文章作成において漢字の使用はほとんどなかった。
・　文章作成は文型・文法、語彙（漢字）項目の集大成であり、各科目の習得状況に応じて修了レポートの内容を修正する必要があろう。　（今尾ゆき子）

《日本語（会話）》

【受講者】４名（非漢字圏４名：フィリピン３名、ミャンマー１名）
【授業時間】１コマ／週　総コマ数：13コマ　【担当教員】中島清

１）目標

指導教員等との意思疎通を行うために必要な会話力、また、地域社会での生活・交流に必要な会話力を習得させることを目標とする。そのため、「みんなの日本語」の語彙・表現範囲に拘らず、必要とされる語彙表現を柔軟に提示する。

２）授業方法

① 作文用テーマを15題提示し、毎週１テーマずつ作文を宿題として課す。　② 授業では毎回、全員が作文に基づき日本語で発表を行い、その発表内容に関して、他の学生が質問しながら、会話を展開させる。作文は添削して返却する　③ その後、「みんなの日本語」各課５問の即答練習を行う。　④ 最後に、日本の歌を紹介するか、又は「新日本語の基礎」の復習ビデオを使って、より自然な会話を学ぶ。

３）成績・評価

・　成績評価割合　期末テスト 100点（即答問題50点、テーマ発表50点）
　　毎週提出作文50点
・　期末テスト内容
①即答問題：質問文20問を予めテープに録音しておく。各問解答時間は約10秒。録音済テープを流し、別のテープレコーダーでＱＡともに収録・採点する。
②テーマ発表：学期期間中に発表した12のテーマの内、各２テーマが記載してある６枚のカードを用意し、その中から抽選で１枚選んでもらい、カードに書いてある２つのテーマから１題を選び、そのテーマについて１分考えた後３分発表、２分質疑応答をして評価する。

４）評価・課題

・　留学生センターの教室は狭く、窮屈な雰囲気が否めないので、より開放的な雰囲気で会話ができるよう、ラウンドテーブルがあり、かつ広々としたラウンジを教室として使ったが、それはよかった。

・　全員社会経験が豊富であり、授業態度もよく、真剣に取り組んでいた。また、作文の内容も豊かで、楽しい雰囲気で授業ができた。

《日本語（文化）》

【受講者】４名（フィリピン３名、ミャンマー１名）　【授業時間】１コマ／週　14コマ

【担当教員】膽吹覚（コーディネータ）、廣谷幸子（華道）、勝木禮子（書道）、柳原智子（陶芸）

１）目標

華道、書道、陶芸について、福井県在住の指導者から直接に指導を受けて体験学習することによって、日本の伝統文化に対する理解を深める。

２）授業内容

（ア）華道（池坊福井中央支部）：７コマ

第１回は華道とその中の池坊について概説し、道具の使い方を説明したうえで、花に親しむことを目的として自由花に取り組んだ。第２回は秋の花をテーマに、自由花を生けた。第３回はクリスマスをテーマに自由花を生けた。第４回は正月の花というテーマで、生花正風体に取り組んだ。第５回は春の花というテーマで生花新風体を学んだ。第６回は修了発表会会場に各自が自由花を生けて、このクラスでの学習成果を発表した。第７回は池坊福井支部花展（３月12・13日、福井県国際交流会館）へ出展した。授業では作品をセンター１階に展示し、終わった作品（花）は使えるものとそうでないものとに分類し、花を慈しむ心を大切にすることを指導した。

（イ）書道（若越書道会）：３コマ

第１回は授業のはじめに筆の持ち方や運び方などの基本を指導し、その後、各自の名前をひらがなで書く練習をした。第２回はカタカナを書く練習をした。第３回は書初めをした。事前に受講生が漢字１字を選定し、それを色紙に書いた。

（ウ）陶芸（越前焼）：４コマ

第1回と第２回は陶芸の道具の使い方など、陶芸の基礎を学んだ上で、中皿と湯飲み茶碗を製作した。第３回と第４回は、前回の授業を受けて、花器と茶碗を制作した。

３）評価と課題

成績は出席状況と各講師からのご意見を総合してコーディネーターが判定した。受講生はおおむね意欲的に取り組んでいたようである。生け花と陶芸のコラボレーションが定着しつつあるので、次回は書道と陶芸のコラボレーションを企画し、実施したい。そのための準備を講師間で綿密に持つ必要がある。なお、今期限りで書道の勝木講師がお止めになるので、来期までに後任の講師を依頼しなければならい。（膽吹覚）

≪コース全体についての課題≫

全学日本語コースとの合同授業を実施し、今年度が２回目となる。多人数クラスで多様な学習者といっしょに学習することの利点は大きく、互いのコースの学生にとってよい影響が生じていると感じる。研修コースの学生にとっては、文型・文法クラスの１限目と２限目の内容にメリハリができ、２限目を特に修了発表に主眼をおいた語彙の補強と拡充に充てることができた。文法クラスの進度の遅さを補うために、補助教材の整備を行っているが、次年度はそれをさらに充実させることが課題である。（桑原陽子）

２．短期留学プログラム日本語コース

《概要》

このコースは、福井大学と交流協定を締結している大学等から受け入れている短期留学プログラムＡコースの学生が共通科目として受講する日本語コースで、日本語・日本事情科目10単位、伝統産業科目２単位が必修である。

2010年前期は、日本語科目６科目（「日本語初中級１」「日本語初中級２」「日本語中級」「日本語上級」、「はじめての漢字」「はじめての作文」「はじめての会話」）、日本事情科目４科目（「日本事情２」「日本の文化」「応用日本語２」「多文化コミュニケーション２」）および「伝統産業２」を開講し、2009年度に受け入れた留学生18名が受講した。

2010年後期は、日本語科目４科目（「日本語初級１」「日本語初級２」「日本語初中級」「日本語中級」「日本語上級」）、日本事情科目３科目（「日本事情１」「多文化コミュニケーション１」「応用日本語１」）および「伝統産業１」を開講し、2010年度に受け入れた留学生20名が受講した。

①　2010年前期

《科目一覧》

科目	教　　員	教　　科　　書	受講者
日本語初中級１	膽吹覚　市村葉子 酢谷尚子	『みんなの日本語初級Ⅱ』	7
日本語初中級２	桑原陽子　村上洋子 酢谷尚子	『みんなの日本語初級Ⅱ』	4
日本語中級（日本語Ａ）	山中和樹	プリント	3
日本語中級（日本語Ｃ）	桑原陽子	プリント	3
日本語上級（日本語Ｅ）	今尾ゆき子	『日本語上級読解』	2
日本語上級（日本語Ｇ）	膽吹覚	『留学生の日本語③論文読解』	2
はじめての漢字	今尾ゆき子	『みんなの日本語初級Ⅰ漢字　英語版』	3
はじめての作文	山中和樹	『みんなの日本語初級やさしい作文』	10
はじめての会話	山中和樹	『みんなの日本語初級Ⅱ』	12
日本事情２	膽吹覚	『越前若狭いろはかるた』	1
日本の文化	膽吹覚	プリント	2
応用日本語２	山中和樹	プリント	3
多文化コミュニケーション２	山中和樹	プリント	0
伝統産業２	中島清	プリント	0

《時間割》

	月曜日	火曜日	水曜日	木曜日	金曜日
１限		日本事情２		日本の文化	
				多文化コミュニケーション２	
２限	日本語初中級１	日本語初中級１	日本語初中級１	日本語初中級１	
	応用日本語２				
３限		はじめての漢字	はじめての作文	はじめての会話	
		日本語中級（C）			
		日本語上級（G）			
４限	日本語初中級２	日本語初中級２	日本語初中級２	日本語初中級２	
		日本語中級（A）			
		日本語上級（E）			

《受講者数》

国名／科目	中国	韓国	インドネシア	フランス	アメリカ合衆国	合計
日本語初中級１	6	0	1	0	0	7
日本語初中級２	2	0	0	2	0	4
日本語中級（日本語Ａ／日本語Ｃ）	1	0	0	0	2	3
日本語上級(日本語Ｅ／日本語Ｇ)	1	0	0	0	1	2
はじめての漢字	0	1	0	2	0	3
はじめての作文	6	2	0	2	0	10
はじめての会話	7	2	1	2	0	12
日本事情２	1	0	0	0	0	1
日本の文化	1	0	0	0	1	2
応用日本語２	2	0	0	0	1	3
多文化コミュニケーション２	0	0	0	0	0	0

国名 科目	中国	韓国	インドネシア	フランス	アメリカ合衆国	合計
伝統産業２	0	0	0	0	0	0
小計	27	5	2	8	5	47

《授業報告》

１．日本語初中級１

・　受講者：７名（中国６名、インドネシア１名）

・　授業時間：４コマ／週　総コマ数：56コマ

・　担当教員：＊膽吹覚、酢谷尚子（＊コーディネーター）

１）教科書及び授業の目標

・　『みんなの日本語初級Ⅱ』（スリーエーネットワーク）
　『みんなの日本語初級Ⅱ文法解説』（スリーエーネットワーク）

・　初中級の日本語の文法、語彙を学び、応用練習をする。

・　日本の社会生活、日常生活を理解し、コミュニケーションができるようになる。

２）方法

（１）授業方法

・　週４コマの中の３コマで文型･語彙の導入を行い、残りの１コマでその定着を図った。凡そ３コマで２課のペースで進めた。ただし、このクラスのほぼ全員が「はじての会話」と「はじめての作文」を履修しており、そのクラスで会話と作文をするために、この授業では会話は割愛した。その一方で、週１回２人ずつ３分間スピーチを担当させて、日本語の運用能力の向上を図った。

（２）小テスト

・　26-30、31-35、36-40、41-45の４回実施した。

（３）成績および評価

・　３分の２以上の出席を前程として、期末試験（80％）とクイズ（20％）の結果をもとに授業態度などを考慮して総合的に判断した。

３）評価と課題

・　期末試験の結果を見る限り、受講生のほぼ全員が50課までの文型・語彙を確かに習得したと見てよいであろう。学生の受講姿勢も良好であった。　（膽吹覚）

２．日本語初中級２

・　受講生：４名（中国２名、フランス２名）

・　授業時間：４コマ／週　総コマ数：61コマ
・　担当教員：＊桑原陽子、村上洋子、酢谷尚子（＊コーディネーター）

１）目標

教科書『みんなの日本語初級Ⅱ』26課～48課を終了。初級の基本的な文法と語彙を習得し、日常生活において円滑なコミュニケーションができるようになることを目指す。

２）方法

（１）教科書『みんなの日本語初級』の取り扱い

・　２日で１課終了。「書いて覚える文型練習帳」等の補助教材も積極的に使用した。
・　各課の新出語彙から５語選択し、短作文問題を作成し、宿題とした。
・　来年度再度来日予定の学習者に対しては、復習の時間を利用して49、50課を学習する時間を設けた。

（２）教科書以外の活動：

・　毎日一人ずつ、自由スピーチや、直前にくじでテーマを決めるスピーチを行った。
・　復習練習の時間を10回設け、そのうちの数回は教科書から離れた会話ロールプレイや「メールの書き方」を取り入れ、実際のコミュニケーションのための話す・書く練習を行った。

（３）成績評価

・　文法復習テスト（筆記）３回（15％分）＋ 修了テスト（85％分）

３）評価

・　全員授業態度は良好であった。学習者間で口頭でのコミュニケーション能力に多少差があり、それに配慮した練習を工夫した。復習の時間に行った、教科書から離れたコミュニケーション中心の練習はおおむね好評であったため、来年度からはこのような練習をもっと取り入れるほうがよいだろう。（桑原陽子）

３．日本語中級（日本語Ａ）

・　受講者：３名（アメリカ２名、中国１名）
・　授業時間：１コマ／週　総コマ数：15コマ
・　担当教員：山中和樹

１）教科書及び授業の目標

・　教科書：プリントを配布
・　擬音語・擬態語や助詞の使い分けなどに関するテーマの文章を読んで初級のまとめをし、それらを実際の作文で使用できるようにする。

２）方法

（１）授業方法

この科目は共通教育科目「日本語Ａ」との合同授業である。授業は、大体、２～３コマに１課のペースでプリント教材を読み、語句の意味や用法の確認をおこなった。

（２）復習クイズ

２回、中間試験として実施した。

（３）成績及び評価

成績評価は規定の出席率（２／３以上）を満たすことを前提として、その上で中間試験と期末試験の結果をもとに判断した。内訳は次のとおり。中間試験（40%）、期末試験（60%）。

３）評価と課題

短プロ生は出席・授業態度とも良好だったが、漢字能力が劣る学生がいたので、受講者全員に漢字の読みのプリントを別途配布した。プリント教材は雑誌に掲載された記事を使用した。

・　今期は漢字能力が劣っている学生がいたので、進度を遅くせざるを得なかった。試験問題も漢字が負担にならないように配慮した。（山中和樹）

４．日本語中級（日本語Ｃ）

・　受講生：3名（中国１名、アメリカ２名）

・　授業時間：１コマ／週　総コマ数：15コマ

・　担当教員：桑原陽子

１）目標

・　文型、語彙を拡充し、適切な表現・語彙を使って与えられた映像について、より詳しい説明・描写ができるようになることを目指す。さらに学生生活上必要なメールの基本的な書き方を学ぶ。

２）教科書　教科書は指定しない。授業中にハンドアウト等を配布する。

３）方法

・　教師が用意した15回分のＶＴＲ（１回数分）について、詳しく適切に描写する練習を行う。口頭での説明練習後、筆記による語彙・文法の確認を行う。主としてペアワークによる活動を行う。

・　授業５回ごとにテストを行い（計３回　配点は各30点）、それに平常点（10点満点）を加算する。

４）評価

・　授業態度は非常に良好であった。

・　待遇表現を意識したメールの書き方、特に定型表現の使い方について学ぶ機会を設けたことは、非常によかったが、まだ不十分であると思う。次年度はさらにこのような練習を拡充させたい。（桑原陽子）

５．日本語上級（日本語Ｅ）

・　受講者：２名（アメリカ１名、中国１名）

・　授業時間：１コマ／週　総コマ数：15コマ

・　担当教員：今尾ゆき子

１）教科書及び授業の目標

・　教科書：柿倉侑子他『日本語上級読解』（アルク）
・　目標：さまざまなテーマの文章を読んで要約することにより、語彙力を増やすとともに読解力および文章作成力を培う。

２）方法

・　１授業１課（１つの読み物）のペースで課題文を読み、単語の意味や指示語の指示内容等の確認、文章の構成と文章全体の流れの把握および内容理解の後、「内容の問題」「言葉の問題」で文章が理解できたかどうかを確認した。
・　各課の重要語句を用いた短文作成５問、要約文（160字程度）および感想・経験等の文章作成(160字程度)を宿題とし、添削の後返却した。
・　成績評価：レポート（50％）、期末試験（50％）

３）評価と課題

・　出席・授業態度は良好。
・　受講者２名とも毎週の課題をきちんと提出した成果として、それぞれ語彙力・表現力が格段に向上した。（今尾ゆき子）

６．日本語上級（日本語Ｇ）

・　受講者：２名（アメリカ１名、中国１名）
・　授業時間：１コマ／週　総コマ数：15コマ
・　担当教員：膽吹覚

１）教科書及び授業の目標

・　『大学・大学院　留学生の日本語③論文読解編』（アルク）
・　レポートや学術論文などの論説文を読むのに必要な文法知識・構造に関する知識などを学びながら、各自の専門分野の論文を独力で読んでいくための基礎的読解力をつけることを目標とする。

２）方法

（１）授業方法

・　教科書に従って、１コマで１課ずつすすめた。本文の読解終了後に課題として感想文を書かせた。

（２）成績および評価

・　期末試験（100％）

３）評価と課題

・　受講者が24名（短プロの２名を加算）であったので、受講生を個別に丁寧に指導することが出来なかった。受講生からも「教員から個別に指導を受けたかった」という指摘があった。今後は受講者数に応じて、シラバスを変更することも必要かもしれない。（膽吹覚）

７．はじめての漢字

・　受講者：３名（フランス２名、韓国１名　）
・　授業時間：1コマ／週　総コマ数：15コマ
・　担当教員：今尾ゆき子

１）教科書及び授業の目標

・　教科書：『みんなの日本語初級Ⅰ漢字　英語版』
・　漢字の読み方、書き方を学ぶ。教科書ユニット１～11の122漢字を習得。

２）方法

（１）漢字導入

原則として１コマ１ユニットで進んだ。最初の１コマ（１週目）で、ひらがなとカタカナの定着度を確認した後、漢字の成り立ちと基本的な筆順を導入した。２コマ目から漢字を導入し、３コマ目からディクテーションを実施した。次回学習項目の予習プリントを配付し、授業ではテキストの練習問題を行うとともに、毎回、読み・書きクイズとディクテーションを行うことにより、漢字の定着を図った。また、適時、作文を課した。

（２）復習クイズ

毎回、当該ユニットの復習クイズ（漢字の読みクイズと書きクイズ）とテキスト巻末のクイズを実施した。学生が提出した答案は、その場で採点して誤答を指摘し学生に修正させる方法をとった。

（３）成績・評価

中間テスト（40%）、期末テスト（60%）とし、総合的に判断した。

３）評価と課題

受講者３名全員が非漢字圏、そのうち２名は母国での漢字学習歴があり、漢字の習得が容易であった。１名は未習で授業に一所懸命ついてきた感がある。３名とも熱心に漢字学習に取り組み、習得状況もきわめて良好で、当初の予定より１ユニット多い11ユニットまで習得した。今回は受講者の漢字学習力に余裕があったので、参考冊“Kanji Reference Booklet”を使って漢字語や未習の読みも導入した結果、漢字の語彙力が大幅に向上した。

課題は、韓国の学生の長音（語中長音欠落：小(ち)さい、大(お)きい、中国語(ちゅうごくご)、お母(か)さん　お父(と)さん）と清・濁音（手紙(てがみ)・友達(ともだち)・高(たか)い・会社(かいしゃ)）の混同である。　（今尾ゆき子）

８．はじめての作文

・　受講者：10名（中国６名、韓国２名、フランス２名）
・　授業時間：１コマ／週　総コマ数：15コマ
・　担当教員：山中和樹

１）教科書及び授業の目標

・　教科書『みんなの日本語初級　やさしい作文』
・　初級の語彙や文法を使って、さまざまなテーマで作文する。

２）方法

（１）授業方法

まず、モデル文を全員で読み、内容を把握する。語彙・文法項目で疑問があれば、質問させる。次に作文のポイントに進み、練習問題をする。最後に、各自が作文する。授業時間内にできないときは宿題とし、次回に提出させる。

・　原則として、１コマ１ユニットで進んだが、最初のユニットは易しいので１コマ２ユニットで進んだ。各課はモデル文の内容解説、教科書の練習問題、「作文メモ」、「書きましょう」（実際の作文）からなっている。文法が不確かな場合は、文法解説も行った。また、学生の誤用例をもとに、間違いやすい箇所を確認していった。

（２）成績評価

・　課題作文提出回数と出席状況・授業態度及び期末試験より総合的に評価した。

３）評価と課題

・　出席・授業態度ともおおむね良好であった。

・　非漢字圏の学生もいたので、板書の際には漢字に振り仮名をつけた。文字の指導には時間をほとんど割かなかった。中国の簡体字と日本の新字体の違いに随時、触れるだけだった。

・　全員が間違いやすい箇所は、作文チェックの翌週、解説を行った。　（山中和樹）

９．はじめての会話

・　受講者：12名（中国７名、韓国２名、フランス２名、インドネシア１名）

・　授業時間：１コマ／週　総コマ数：15コマ

・　担当教員：山中和樹

１）教科書及び授業の目標

・　教科書『みんなの日本語初級Ⅱ』

・　指導教員との会話、学外での会話において、自分、趣味、専門などについて話せるように表現や語彙を習得する。

２）方法

（１）授業方法

教科書の各課の会話のテープをまず聴き、内容を理解する。その際、教科書は見ないようにする。次に教科書を見て内容を確認する。次に、教科書を見ないで一文ずつ、テープの会話を暗唱する。それから、その課の教授項目の表現を使用して、指導教員や他の学生と自由な会話の練習をする。最後に、ビデオを見て、その課の内容を確認し、終了する。

初めは１コマの授業で１課の進度だったが、文法クラスの進度が速くなるとともに２課行うようになった。

３）評価と課題

・　出席状況・授業態度及び期末試験（個別の会話試験）より総合的に評価した。

出席・授業態度とも良好であった。出席率はほぼ100％。

・　このクラス所属の学生12名は文法クラスでは２つのクラスに分けられている。一方のクラスの進度が他方よりやや遅れていることもあって、遅れているクラスの進度に合わせざるを得なかった。そのため、当初予定していたよりも遅れが出た。当面、『みんなの日本語初級Ⅰ』の復習項目も交えて会話練習を行った。最終的にはほぼ予定どおり、文法クラスの進度に合わせて48課まで終了することができた。
・　課題としては受講者数が多かったため、一人一人の会話練習の時間が十分ではなかったことがあげられる。今後、受講者数が増えるとクラスを２つに分けることも必要になろう。（山中和樹）

10. 日本事情２

・　受講者：１名（中国１名）
・　授業時間：１コマ／週　総コマ数：15コマ
・　担当教員：膽吹覚

１）教科書及び授業の目標

・　『越前若狭いろはかるた』（ふくい文化研究会）
・　郷土カルタを教材に、福井県の地理・名所・名産・偉人などの学習を通して、福井県に関する知識を醸成し、理解を深める。

２）方法

（１）授業方法

・　受講生が２枚ずつカルタの札を選び、その札に書かれた内容について調査し、その結果を日本語でプレゼンテーションした。学生の発表後、教員による補足解説を行なった。

（２）成績および評価

レポート（60%）、プレゼンテーション（２回、各20%）

３）評価と課題

・　『越前若狭いろはかるた』は膽吹が教育地域科学部教員と共同で開発した教材であるが、今回、初めて授業で使用した結果、地理・名産・名所は学生の理解を得られたが、宗教関係（永平寺・泰澄・蓮如）、歴史上の偉人（継体天皇・橘曙覧・由利公正）は理解しにくいようであった。今後の課題としたい。（膽吹覚）

11. 日本の文化

・　受講者：２名（アメリカ１名、中国１名）
・　授業時間：１コマ/週　　総コマ数：15コマ
・　担当教員：膽吹覚

１）教科書及び授業の目標

・　教科書は使用しなかった。
・　日本の伝統的な遊戯について学ぶことで、その背景にある日本文化、日本人の心性について考える。

２）方法

（１）授業方法

・　日本の伝統的遊戯――しりとり、折り紙、いろはカルタ、百人一首、将棋、囲碁、福笑い、おはじき、すごろくなど――を取り上げて、教員がその歴史、遊び方、そこに見られる文化的特徴などについてパワーポイントを使って講義したあと、受講生が実際にその遊戯を体験し、教員と学生のディスカッションを経て、最後には課題（主にその遊戯についての意見）を課し、作文を提出させた。

（２）成績および評価

・　レポート（100%）

３）評価と課題

・　学生に実際に遊戯を体験させることで、授業への参加意欲を高めることにつながったようである。アンケートによると、遊戯を通して日本・日本人を論じることに興味を抱いてくれたようであり、シラバスに記した目標はほぼ達成できたと見てよいであろう。　（膽吹覚）

12. 応用日本語２

・　受講生：３名（中国２名、アメリカ１名）

・　授業時間：１コマ／週　総コマ数：15コマ

・　担当教員：山中和樹

１）教科書及び授業の目標

・　教科書：日本経済新聞土曜版掲載シリーズ「仕事常識」のプリント

・　日本経済新聞掲載「仕事常識」を通して、日本企業における職場マナーを学ぶ。また、それを通して、現代日本の社会文化を理解する視点を養うとともに、語彙力、理解力、表現力の向上を図る。

２）方法

（１）授業方法

この科目は共通教育科目「応用日本語Ｉ」との合同授業である。導入として、新聞記事の聴解を通して概略を把握する手法を実施した。導入後は教材の講読、内容質問等を行った。

（２）復習クイズ

各回１つの記事を読み切った後、次回にその内容に対する試験（記述試験）を実施した。試験については実施の次週に採点返却し、模範解答を配布した。

（３）成績及び評価

成績評価は規定の出席率（２／３以上）を満たすことを前提とし、その上で復習クイズの成績と期末試験（電話応対試験）の結果をもとに、総合的に判断した。

３）評価と課題

・　このクラスは共通教育との合同クラスであるが、正規生より非正規生のほうが日本語能力も高く、授業態度もよかった。また、正規生のために、資格外活動としてのアルバイトや卒業後

日本国内企業に就職するために役立つようにコースが設定されているが、非正規生にとっても、日本の企業文化、マナーを学ぶことができるメリットがある。今後は、非正規生にとってもより魅力があり、かつ正規生にとっても有用な記事を拡充していく必要がある。短プロ生の２名は出席及び授業態度も良好で、成績も満足できるものだった。

・　なるべく多くの項目を紹介しようとしたため、電話応対や名刺交換の実地練習があまりできなかった。今後は、項目を厳選して、練習にもより多くの時間を割きたい。　（山中和樹）

13. 多文化コミュニケーション２

本科目の受講者なし。

14. 伝統産業２

「伝統産業」については、「伝統産業Ⅰ」（秋開講）か「伝統産業Ⅱ」（春開講）のどちらかを履修することになっているが、全員が「伝統産業Ⅰ」を履修したため、「伝統産業Ⅱ」の履修者はいなかった。　（中島清）

②　2010年後期

《科目一覧》

科目	教　　員	教　　科　　書	受講者
日本語初級１	今尾ゆき子　村上洋子	『みんなの日本語初級Ⅰ』	5
日本語初級２	山中和樹　酢谷尚子	『みんなの日本語初級Ⅰ』	9
日本語初中級	膽吹覚　村上洋子 酢谷尚子	プリント	1
日本語中級（日本語Ｂ）	膽吹覚	『留学生の日本語③論文読解』	5
日本語中級（日本語Ｄ）	山中和樹	プリント	5
日本語上級（日本語Ｆ）	今尾ゆき子	『日本語上級読解』プリント	0
日本語上級（日本語Ｈ）	桑原陽子	プリント	0
日本事情１	今尾ゆき子	プリント（『日本を知る』他）	4
応用日本語１	中島清	プリント	0
多文化コミュニケーション１	山中和樹	プリント	1
伝統産業１	中島清	プリント	20

《時間割》

	月曜日	火曜日	水曜日	木曜日	金曜日
１限	応用日本語１			多文化コミュニケーション１	
２限	日本語初級1	日本語初級１	日本語初級１	日本語初級1	
	日本語初級２	日本語初級２	日本語初級２	日本語初級２	
		日本事情１			
３限	日本語初中級	日本語初中級	日本語初中級	日本語初中級	伝統産業１
		日本語中級（D）			
		日本語上級（H）			
４限		日本語中級（B）			
		日本語上級（F）			

《受講者数》

国名／科目	中国	韓国	インドネシア	フランス	アメリカ合衆国	合計
日本語初級１	4	0	0	1	0	5
日本語初級２	8	1	0	0	0	9
日本語初中級	0	0	0	0	1	1
日本語中級（日本語Ｂ／日本語D）	2	0	1	0	2	5
日本語上級（日本語Ｆ／日本語H）	0	0	0	0	0	0
日本事情１	2	0	1	0	1	4
応用日本語１	0	0	0	0	0	0
多文化コミュニケーション１	1	0	0	0	0	1
伝統産業１	14	1	1	1	3	20
小計	31	2	3	2	7	45

《授業報告》

１．日本語初級１

・　受講者：５名（中国４名、フランス１名）

・　授業時間：４コマ／週　総コマ数：60コマ

・　担当教員：＊今尾ゆき子、村上洋子（＊コーディネーター）

１）教科書及び授業の目標

・　テキスト『みんなの日本語初級Ｉ』25課終了。初級の基本的な文法と語彙を習得。

・　ひらがな・カタカナの定着。

２）方法

（１）授業方法

・　原則として２課を４コマで行った。１課を１コマで導入。３コマ目に２課分の談話練習と運用練習を行い、４コマ目に復習、復習テスト実施。

・　「会話」：復習の時間に16回（１～25課）実施。

・　「聴解」：各課「問題」の聴解部分はテープを貸し出して宿題。

・　「文字・表記」：

①　「ひらがな」、「カタカナ」を各５コマ導入（各コマ10分程度）。

②　確認テスト：ひらがなテスト１（清音）、ひらがなテスト２（濁音・拗音・長音・撥音・促音）、カタカナテストを実施。

③　「かな」導入後、談話練習と復習の時間に10分程度「語彙クイズとディクテーション」（５～25課）を21回実施。語彙クイズ：６問、ディクテーション：４問。

④　12課導入後、毎回1人ずつスピーチを実施（スピーチ原稿は添削後返却）。

（２）復習テスト

・　６回実施。

（３）成績および評価

・　復習テスト６回（20％）と期末テスト（80％）の結果をもとに総合的に判断した。

３）評価と課題

・　授業開始前における「ひらがな」の習得状況は、非漢字圏の１名を除き４名が清音習得。２週間（５コマ）のかな文字導入期間で、全員が清音、特殊音ともに定着し、文型導入に支障がなくなった。カタカナも５コマの導入で定着。

・　出席、授業態度、成績とも全員きわめて優良。　（今尾ゆき子）

２．日本語初級２

・受講生：９名（中国８名、韓国１名）

・授業時間：４コマ／週　総コマ数：57コマ

・担当教員：＊山中和樹、酢谷尚子（＊コーディネーター）

１）教科書及び授業の目標

・　テキスト『みんなの日本語初級Ⅰ』25課終了。『みんなの日本語初級Ⅱ』30課終了
初級の基本的な文法と語彙を習得。
・　ひらがな・カタカナの導入と定着

２）方法

（１）授業方法

・　初級クラスの中でもプレースメントテストの結果がよかった方のクラスで、14課ぐらいまでの文法項目は学習済みの学生もいた。そのため、１～３課までは1コマで、４課から13課までは１課を１コマで進めた。14課以降は１課を２コマで行った。復習は最初の３回は６課ごとに行った。その後は大体４課ごとに行った。その際、テキストの会話の部分はビデオを使用した。

・　テキストの復習Ａ～Ｅ、練習プリント（『書いて覚える文型練習帳』他から作成）をほぼ毎回、宿題にして文法及び語彙の定着を図った。

（２）復習テスト：４回実施（５～６課ごとに１回）

（３）ひらがな・カタカナの導入

・　ひらがなとカタカナは学習済みだったので、長音・促音などの指導を随時行った。

（４）ディクテーション

・　復習テストでも表記のミスは少なかったので、今期は特に行わなかった。

（５）評価

・復習テスト４回（20%）＋ 期末テスト（80%）の結果をもとに総合的に判断した。

３）評価と課題

（１）文型・語彙導入

・　今回は学生が総じて優秀で、理解力も応用力も十分あった。

（２）文字習得

・　９名全員が既習であった。授業開始前のひらがなテスト（清音43文字）でも全員正答率90%以上。カタカナテスト（清音43文字）は正答率90%以上の学生は９名中５名。いずれも最終的に優秀な成績を残している。

（３）学生の出席率と成績

・　出席は非常に良好。ただし、事情により１か月間受講できなくなった学生がいたので、復帰後には課題を与えた。本人の努力の結果、最終的には優秀な成績を収めた。

・　授業態度、成績ともに優良。ただし、２名は学習項目が増えるとともに、やや消化不良に陥った。その結果、この２名は良、他は全員優となった。ちなみに、この２名の授業開始前のカタカナテストの成績は43点満点の16点と31点であった。

（４）アンケート調査

・　９名中８名は授業には「非常に満足」と答えていた。残る1名は「少し満足」。

（山中和樹）

３．日本語初中級

・　受講者：１名（アメリカ１名）

・　授業時間：４コマ／週　総コマ数：58コマ

・　担当教員：＊膽吹覚、酢谷尚子、村上洋子（＊コーディネーター）

１）教科書及び授業の目標

・　『中級を学ぼう　中級前期』（スリーエーネットワーク）

・　中級前期の日本語の文法、語彙を学び、応用練習をする。

・　中級レベルのスピーチができるようになる。

２）方法

（１）授業方法

・　週４コマの中の３コマは教科書を使用し、残りの１コマはスピーチのクラスとした。教科書は３コマで１課とし、６課（全８課）まで進んだ。スピーチのクラスでは、スピーチ原稿のチェック、スピーチのビデオ録画による指導などでスピーチの能力の向上を図った。

（２）小テスト

・　１－３、４－６の２回実施した。

（３）成績および評価

・　３分の２以上の出席を前程として、期末試験とスピーチのテスト（80%）、小テスト（20%）の配分で判断した。

３）評価と課題

・　期末試験の結果を見る限り、受講生が６課までの文型・語彙を確かに習得したと見てよいであろう。学生の受講姿勢も良好であった。

・　今期は１名という少人数ゆえに、日本語による留学生同士のディスカッションなどができなかった。今後、１名あるいは２、３名というケースが生じた場合は、他のコース、例えば短プロ（Ｂコース）との合同クラスも選択肢にいれてよいのではないだろうか。受講生のよりよいクラス環境の提供が求められている。（膽吹覚）

４．日本語中級（日本語Ｂ）

・　受講者：５名（アメリカ２名、中国２名、インドネシア1名）

・　授業時間：１コマ／週　総コマ数：15コマ

・　担当教員：膽吹覚

１）教科書及び授業の目標

・　プリント配布

・　授業でのプレゼンテーションに役立つことを目標とし、日本語によるスピーチレッスンを行った。

２）方法

（１）授業方法

・　１コマで１テーマの発表とした。発表時間は前半が１分、後半が３分とした。発表後は、他の学生との日本語によるＱ＆Ａを行った。
・　テーマは「私の専門」「日本語を学ぶ理由」といった個人的な意見からはじめ、新聞の人生相談記事に対するアドバイス、日本の社会問題に対する提言へと徐々にレベルを高めていった。

（２）成績および評価

・　期末試験（100%）

３）評価と課題

・　受講生はおおむね積極的に授業に参加しており、期末試験の結果を見る限りスピーチの能力も向上したといえる。
・　スピーチの準備を疎かにする学生はほとんどなく、学生間のＱ＆Ａも教師の予想以上に活発であった。共通教育受講生と合わせて10名というクラスサイズは、こうした授業には適したサイズであったことが良い結果に繋がったと思われる。
・　個々の文法的な誤りの訂正や身振りの修正など、個々の生徒にもっと丁寧な指導ができればよりよい授業になったと思われるので、この点を今後の課題としたい。　（膽吹覚）

５．日本語中級（日本語Ｄ）

・　受講生：５名（アメリカ２名、中国２名、インドネシア1名）
・　授業時間：１コマ／週　総コマ数：15コマ
・　担当教員：山中和樹

１）教科書及び授業の目標

・　教科書：プリントを配布
・　「テ形」と連用中止の使い分け、「は」と「が」の使い分け、「のである」文の用法などを学習し、それらを実際の作文で使用できるようにする。

２）方法

（１）授業方法

この科目は共通教育科目「日本語Ｄ」との合同授業である。授業は大体２～３コマに１課のペースで進んだ。各課の初めに漢字の読み及び漢字語の意味を確認した。次に各項目を解説し、最後に練習問題をおこなった。

（２）復習クイズ

２回、中間試験として実施した。

（３）成績及び評価

成績評価は規定の出席率（２／３以上）を満たすことを前提としており、そのうえで中間試験と期末試験の結果と課題提出状況をもとに判断した。内訳は中間試験（20%）、期末試験（60%）、課題（20%）。

３）評価と課題

・　漢字能力に難がある学生がいたので、受講者全員に漢字の読みのプリントを別途配布した。プリント教材は現在絶版の「にほんごの作文」の中の文法のまとめに関する項目を使用した。
・　試験問題も非漢字圏の学生にとって漢字が負担にならないように、試験問題にもルビを振るなどの配慮をしたので、結果も著しい不均衡を回避できた。　（山中和樹）

６．日本語上級（日本語Ｆ／日本語Ｈ）

本科目の受講者なし。

７．日本事情１

・　受講者：４名（中国２名、アメリカ１名、インドネシア１名）
・　授業時間：１コマ／週　総コマ数：15コマ
・　担当教員：今尾ゆき子

１）教科書及び授業の目標

・　教材：ハンドアウト（『日本を知る―その暮らし365日―』から抜粋）、プリント
　　ＤＶＤ：「年中行事としきたり」、NHK 録画ビデオ「ゆく年・くる年」など。
・　目標：日本の社会構造や文化、日本人の考え方・価値観を学ぶとともに自国の文化や価値観を再認識する。

２）方法

（１）授業方法

・　ハンドアウト、ＤＶＤ、ビデオなどで年中行事やしきたりについて学び、日本人の考え方を知る。
・　見学授業：福井の歴史、風土、産業を学ぶ。
　①　福井県立歴史博物館（10／26）
　　「福井県の歴史」「昭和のくらし」「赤」展（特別展）
　②　福井市立郷土歴史博物館(12／８)：
　　「福井市の歴史」「参勤交代衣装の着付け体験」「養浩館」
・　体験授業
　①　俳句大会（12／21）：
　　俳句の成り立ちと形式を学んで各自６句の投句を課し、句会形式で合同発表。
　②　かるた大会(１／18)：「越前・若狭いろはかるた」（ふくい文化研究会作成）を使用。読み札の内容（福井の名所・名産等）を事前学習の後、牧島荘にて実施。畳の上で日本の伝統的な遊びを体験。

（２）成績及び評価

・　レポート（国民の休日・見学・句作・かるた大会）：50％、期末試験：50％

３）評価と課題

・　出席および授業態度も良好。特に見学授業や俳句大会・かるた大会などのイベントは楽しん

で参加した。

・　「日本事情１」は共通教育の「日本事情Ｂ」（学部生12名、短期プログラムＢコース６名　Ａコース２名）との合同授業である。欧米系学生の積極的な授業参加の姿勢はアジア系学生に刺激を与え、文化の違いをあらためて認識させる良い機会となった。　（今尾ゆき子）

８．応用日本語１

本科目の受講者なし。

９．多文化コミュニケーション１

・　受講生：１名（中国１名）
・　授業時間：1コマ／週　総コマ数：15コマ
・　担当教員：山中和樹

１）目標

日本人学生と留学生との対話や質疑応答を通じて、お互いの文化について理解し、異文化との交流方法の基礎を習得する。

２）方法

（１）授業方法

この科目は共通教育科目「多文化コミュニケーションＡ」との合同授業である。授業はプリントやＣＤを利用した講義、及び学生の発表とからなる。学習内容は①人名の付け方、②学生の出身国の国家の紹介、③学生の出身国の祝祭日及び年中行事の紹介、④伝統的な遊び、数に関すること等であった。

（２）復習クイズ

復習クイズは実施していない。①名前に関すること、②国歌に関すること、の２種のレポートを項目終了後に課した。

（３）成績及び評価

成績はセンター規定の出席率を満たすことを前提とした。そのうえで中間レポート２種と最終レポート（祝祭日・年中行事）の評価、授業に対する積極的参加等の貢献を総合して判断した。

３）評価と課題

・　この授業は共通教育科目との共同授業であり、また、日本人学生との共同授業であるので、短プロ生の日本語能力が懸念されるが、今回は特に問題はなかった。毎回多くの資料を配布しているが、今回は解説をいつもより丁寧に行った。また、名前についての資料が増えてきたので、その分、解説の時間も増えた。結果的に、今期は葬式、霊などに関する項目まで進むことができなくなった。
・　今期は日本人学生が約３分の２を占めた。その結果、留学生が少なくなり、留学生による発表の負担が多くなった。　（山中和樹）

10. 伝統産業１

・　受講生：20名（中国14、アメリカ３、韓国１、フランス１、インドネシア１）
・　訪問見学回数：６回（１回の見学は授業３コマ相当）
・　担当教員：中島清

１）目標

伝統産業が地域や日本全体の産業技術の発展にどのように関っているのか。家内工業から出発した伝統産業がグローバル化にどう対処しているのか。伝統産業を守り、発展させながら、次世代に技術継承するためにどのような課題があるのか。和紙の里、漆器会館、陶芸村など、伝統産業の同業者組合と共同施設の役割はどのようなものなのか。そのような視点から、日本の現代産業の背景にある伝統産業を通して現代の日本社会の理解を深める。

２）方法

福井の伝統工芸である、「越前焼」「越前和紙」「越前漆器」「越前打刃物」等の創作生産現場を６箇所訪問見学する。工房では伝統工芸の歴史、技術、研鑽、課題等について専門家（伝統工芸士）の話を聞く。更に、研修施設での実習も行う。６回の訪問について毎回レポートを提出してもらい、理解の深まりを確認する。

３）評価と課題

・　成績評価：見学訪問先ごとに提出される報告書に基づき評価する。
・　生産現場を直接訪問し、伝統工芸士から話を聞くので、講義等では得がたい、深い理解と確かな知識が得られている。
・　従来、バス片道１時間圏内だけでなく、若狭地方、加賀地方の伝統産業見学も行っていたが、2006年度より、見学先を福井市郊外に限定することになり、その結果、見学先数の確保が難しく、実質後期のみの開講となっている。
・参加者20名というのは、騒音を伴う工場等での説明で、声が届きにくいという難点があるが、平成２年度よりトランシーバーを全員に持たせることによって全員が均等に説明を聞けるようになった。

（中島清）

《むすび》

2008年から、中・上級レベルの学生にも対応すべく上級日本語と日本事情科目を増設した。これにより、短期プログラムＡコースの日本語・日本事情科目は初級から上級までのラインアップとなった。このうち日本事情科目は中級以上の学生が受講可能な科目である。ところが、日本事情科目は共通教育科目と抱き合わせの授業であることから（例：短期プログラム科目日本事情１と共通教育科目日本事情Ｂ、応用日本語１と応用日本語Ⅱなど）、初中級レベルの学生が共通教育科目として受講するケースがでてきた。このような場合、学生の日本語力が十分でないため、授業についていくことが困難な状況が生じている。学生の日本語力に応じた日本語・日本事情教育という観点から、適切な科目履修が望まれる。

（今尾ゆき子）

３．全学向け日本語コース

１．概要

本コースは本学で学ぶすべての留学生及び外国人研究者を対象として開設された日本語の補講コースである。本年度は例年通り前後期ともに日本語Ⅰ～Ⅳの４クラスを開講した。

２．開講科目と教科書

① 日本語Ⅰ（前期後期共通）……『みんなの日本語初級Ⅰ』（スリーエーネットワーク）
② 日本語Ⅱ（前期後期共通）……『みんなの日本語初級Ⅱ』（同上）
③ 日本語Ⅲ（前期後期共通）……『みんなの日本語中級Ⅰ』（同上）
④ 日本語Ⅳ（前期）……『中級日本語文法要点整理ポイント20』（同上）
　日本語Ⅳ（後期）……『中級を学ぼう中級中期』（同上）

３．プレースメント・テスト

前期：2009年４月16日（金）　受験者数16名
後期：2009年10月15日（金）　受験者数21名

４．継続受講者数

		日本語Ⅰ	日本語Ⅱ	日本語Ⅲ	日本語Ⅳ	合計
前期	登録可能数	7	15	11	17	50
	登録数	4	12	4	11	31
	登録率	57	80	36	65	62
後期	登録可能数	8	6	13	17	44
	登録数	2	5	10	10	27
	登録率	25	83	77	59	61

５．受講登録者数

	日本語Ⅰ	日本語Ⅱ	日本語Ⅲ	日本語Ⅳ	合計
前期	8	13	16	11	48
後期	13	7	15	15	50

６．授業報告

《前期》

①　日本語Ⅰ

・　受講者：８名（中国４、インドネシア１、タイ１、マダガスカル１、バングラディシュ１）
・　授業時間：５コマ／週　総コマ数：66コマ
・　担当教員：澤崎幸江、酢谷尚子、村上洋子＊
・　コーディネーター：今尾ゆき子

１）教科書及び授業の目標

・　教科書：『みんなの日本語初級Ⅰ』『みんなの日本語Ⅰ文法解説書』（スリーエーネットワーク）
・　日本語の基本を理解し、簡単な日常のコミュニケーションができるようにする。

２）方法

（１）授業方法

１課を２回のペースで行い、途中に復習を10回入れて、定着を図った。復習テストは４回行った。授業の進め方としては、１課の文法項目を２回に分け、それぞれの文法項目を基本練習から応用練習までできるように毎回進めた。今期の学生は、再履修者も３名いて、ひらがなは最初からできる学生ばかりであったので、特殊音や、カタカナのディクテーションを中心に、かなの定着を図った。

（２）成績および評価

成績評価はセンターの規定の出席率を満たすことを前提とし、期末テスト80％、復習テスト４回各５％の結果をもとに、総合的に判断した。

３）評価と課題

受講者８名でスタートした。（１回だけ出席した学生１名を含む）今期の学生は７月以降出席率が悪くなり、テストを受けなかった１名を除いて、出席率、授業態度共に良く、大変熱心だった。非漢字圏の学生が３名いたがそのうちの２名は２度目の履修で最初は余裕があったものの、14課以降、様々な文型と、活用が出てくると、だんだん授業についてくるのが大変になった。それでもお互いに切磋琢磨し、途中で脱落することなく、良の成績で合格することができた。日本語Ⅱに進むにあたり、助詞の定着が正確でない事が、反省すべき点である。また、集中的に３か月勉強したが、この後夏休みに入り、２ケ月以上授業がないのでその間に覚えた事を忘れないように、宿題のプリントを課した。後期の授業の初日に提出し、チェックテストをする予定である。

（村上洋子）

②　日本語Ⅱ

・　受講者：13名（中国９名、ペルー、ミャンマー、キューバ、インドネシア各１名）
・　授業時間：５コマ／週　66コマ
・　担当教員：澤崎幸江、市村葉子（６月16日迄）、高瀬公子＊
・　コーディネーター：桑原陽子

１）教科書及び授業の目標

・　『みんなの日本語初級Ⅱ』・『みんなの日本語初級Ⅱ　文法解説』（スリーエーネットワーク）

・　初級レベルの基本文法と語彙を習得し、日常生活において円滑なコミュニケーションができるようになることを目指す。

２）方法

（１）授業方法

学習範囲は『みんなの日本語Ⅱ』の26～50課で、１課を２回のペースで行った。日本語Ⅲ担当の教師からの依頼で、今期から49、50課を学習範囲に加えた。２～３課ごとに復習の時間を設け学習項目の定着を図った。１回の進め方としては、各課の導入項目を２回に分け、その日に導入した文法項目を基本練習から応用まで行った。副教材は主に『文型練習帳』を使い、各課2コマ目にはビデオを視聴した。また、基本的な漢字が読めるようにするため、『みんなの日本語初級Ⅰ漢字英語版』の漢字を１日５～６字フラッシュカードで読む練習をし、２ユニット毎にプリントで復習させた。

（２）復習テスト・期末テスト

26～33課、34～41課、42～50課をひとまとめとして、復習テストを３回行った。期末テストの範囲は26～48課とした。漢字の学習意欲を高めるために復習テスト、期末テスト共に10点漢字の読みを出題した。漢字圏と非漢字圏の不公平感を避けるため、漢字圏は読みを書かせる問題、非漢字圏は読みの４択問題とし、配点には含まず100点＋10点のように表示した。

（３）成績及び評価

成績評価はセンターの規定の出席率を満たすことを前提とし、復習テストは各５％、期末テストは85％に換算して総合点で判断した。

３）評価と課題

登録した13名のうち11名が出席率を満たし、10名が期末テストを受けた。そのうち８名が合格点に達した。内訳は優が６名、可が２名だった。授業中は皆まじめで、熱心且つ協力的にクラス活動に参加していた。日本語Ⅱは学習項目が多いため、復習を繰り返し、定着を図る努力をした。しかし専門の授業と時間が重なり、週２～３回しか出席できないなどという事情がある場合は申請した曜日の出席率を満たしていても未消化の学習項目を抱えていることが成績から伺われた。また、非漢字圏の中には語彙が定着していない学生が見られた。　（高瀬公子）

③　日本語Ⅲ

・　受講者：16名（中国15名、韓国１名）

・　授業時間：４コマ／週　合計53コマ

・　担当教員：市村葉子、齋藤ますみ、澤崎幸江、酢谷尚子＊

・　コーディネーター：膽吹覚

１）教科書及び授業の目標

・　教科書：『みんなの日本語初級Ⅱ』『みんなの日本語初級Ⅱ　文法解説書』『みんなの日本語中

級Ⅰ』『みんなの日本語中級Ⅰ翻訳』（スリーエーネットワーク）

・　中級前期に必要な「話す・聞く」、「読む・書く」の総合的な言語能力と自ら学ぼうとする力を培うこと目標とする。

２）方法

（１）授業

１週目に『みんなの日本語Ⅱ』49課、50課で敬語を学習した。２週目から『みんなの日本語中級Ⅰ』を、３、４日に１課のペースで進めた。１日目に文法、２日目に文法と話す・聞く、３日目に読む・書くを行い、語彙は３、４日に分けて導入した。テスト前に復習として教科書の問題を行った。

（２）漢字

漢字は『みんなの日本語Ⅱ』の漢字テキストをもとに、毎回フラッシュカードを使って、１日に８～９字読めるようにした。２課毎に復習として漢字プリントを配布し読み方を書かせた。漢字の学習意欲を高めるために復習テスト、期末テストともに10点の漢字の読みを選択問題で出題した。

（３）成績評価

センター規定の出席率を満たすことを前提とし、復習テスト３回（15%）、期末試験（85%）の結果を基にして授業態度などを考慮して、総合的に判断した。

３）評価と課題

出席率を満たした６名が期末試験を受けて６名とも合格。今期初めてこの教科書を使ったが、積極的に意見を言い合い、ペアで活発に会話練習をすることができた。全12課まで終了したが、時間に余裕があれば、読む・書くの後の「チャレンジしましょう」などを使って、スピーチや作文練習ができたらなおよかったと思う。語彙の量がかなりあるので、今後どうやって導入し定着させていくかが課題である。（酢谷尚子）

④　日本語Ⅳ

・　受講者：11名（中国８名、韓国２名、フランス１名）

・　授業時間：4コマ／週　合計53コマ

・　担当教員：齋藤ますみ、高瀬公子

・　コーディネーター：山中和樹

１）教科書及び授業の目的

・　教科書：『中級日本語文法要点整理ポイント20』（スリーエーネットワーク）、『語彙力ぐんぐん　１日10分』（スリーエーネットワーク）

・　中級レベル以上の学生を対象に、主に文法関連の学習事項を整理することを目標とした。

２）方法

（１）授業

教科書『中級日本語文法要点整理ポイント20』を２回で１課のペースで行い、全20課まで終

了した。小テストは実施しなかったが、５課毎に復習を設け定着を図った。副教材として『語彙力ぐんぐん　１日10分』を抜粋して使用し、語彙や表現を補充した。内容のある課ではその話題について話すなどし、文法中心の単調な授業に変化をつけるようにした。

（２）活動

全５回の活動の時間では主に視聴覚教材を使用した。15分～30分のドラマを視聴し、その中の語彙や文法、表現などを確認しテーマについて話し合った。

（３）成績評価

成績評価はセンター規定の出席率を満たすことを前提とし、期末テストで判定した。

２）評価と課題

出席率を満たした５名のうち、３名が期末試験を受けて３名とも合格した。受講者のほとんどが日本語能力試験を受験する学生であったためか、文法中心の授業に皆熱心に参加していた。しかしながら、授業時間が専門の授業と重なったり研究の忙しさからか、一週間継続して授業に来られる学生は多くなく曜日によって出席人数に差があった。Ⅳコースの場合、受講者のニーズにどのように対応していくかが毎回の課題であると考える。今後も習得度に差があったり、受講目的が疎らな受講者達の要望にできるだけ柔軟に応えていければいいと思う。　　（齋藤ますみ）

《後期》

①　日本語Ⅰ

・　受講者：13名（中国９名、バングラデシュ２名、インドネシア１名、タイ１名）
・　授業時間：５コマ／週　64コマ（大雪のため２コマ休講）
・　担当教員：桑原陽子（コーディネーター）、澤崎幸江、敷田紀子

１）教科書及び授業の目標

・　教科書『みんなの日本語初級Ⅰ』『みんなの日本語初級Ⅰ文法解説書』
・　日本語で簡単な口頭でのコミュニケーションができるようになる。
・　日本語のひらがな・カタカナの読み書きができるようになる。

２）方法

（１）授業方法

１課をおよそ２日で終えるペースで学習した。副教材として、適宜聴解や文型練習プリント類を使用した。

（２）復習クイズ

学生の習得状況を確認するため、３回の復習クイズを実施した。

（３）成績及び評価

成績評価はセンター規定の出席率を満たすことを前提とし、復習クイズ15％と期末試験85％として評価した。

３）評価と課題

出席者の学習態度は良好で、特に問題はなかった。授業前半に復習の時間を増やしたことが文

字、文型定着につながったので、来期からも同様のスケジュールで進めたい。一方、このクラスでは、学習開始後２週間で最低限ひらがなを習得する必要があるが、それができず、クラスに出席しなくなる学習者がいる。プレースメント・テスト終了後に、かな教材を配布し予習指導を行っているが、あまり効果がない。学習を途中でやめてしまう学生をどのようにケアするかが課題である。（桑原陽子）

②　日本語Ⅱ

・　受講者：７名（中国６名、タイ１名）
・　授業時間：５コマ／週　64コマ（大雪のため２コマ休講）
・　担当教員：斉藤ますみ、高瀬公子＊
・　コーディネーター：今尾ゆき子

１）教科書及び授業の目標

・　『みんなの日本語Ⅱ』『みんなの日本語Ⅱ文法解説』（スリーエーネットワーク）
・　初級レベルの基本文法と語彙を習得し、日常生活において円滑なコミュニケーションができるようになることを目指す。

２）方法

（１）授業方法

学習範囲は『みんなの日本語Ⅱ』の26～50課で、１課を２回のペースで行った。３～４課ごとに復習の時間を設け学習項目の定着を図った。１回の進め方としては、各課の導入項目を２回に分け、その日に導入した文法項目を基本練習から応用まで行った。副教材は主に『文型練習帳』を使い、各課２コマ目にはビデオを視聴した。また、基本的な漢字が読めるようにするため、『みんなの日本語初級Ⅰ漢字英語版』の漢字を１日５～６字フラッシュカードで読む練習をし、２ユニット毎にプリントで復習させた。

（２）復習テスト・期末テスト

26～33課、34～41課、42～50課をひとまとめとして、復習テストを３回行った。敬語をテスト範囲に加えるのは学習者の負担が大きいと判断し、期末テストの範囲は26～48課とした。漢字の学習意欲を高めるために復習テスト、期末テスト共に10点漢字の読みを出題した。漢字圏と非漢字圏の不公平感を避けるため、漢字圏は読みを書かせる問題、非漢字圏は読みの４択問題とし、配点には含まず100点＋10点のように表示した。

３）成績及び評価

成績評価はセンターの規定の出席率を満たすことを前提とし、復習テストは各5%、期末テストは85%に換算して総合点で判断した。

４）評価と課題

今期は出席率の低さが目立った。登録した７名のうち出席率を満たしたのは３名だけだった。出席率を満たした学生は全員期末テストを受けた。３名の内訳は優が２名、不可が１名だった。授業中は皆まじめで、熱心且つ協力的にクラス活動に参加していた。

反省点として漢字学習のやり方が挙げられる。現行の漢字指導は全く読めない学習者を想定した物で、漢字圏の学習者には易しすぎる。来期は非漢字圏には現行のやりかたで、漢字圏の学習者にはもう少し程度の高い教材を使い、二部形式で行ってみたい。また、漢字の読み方の表記を含めて、発話練習だけでは確かめられない表記の間違い指導のために、ディクテーションを毎時間取り入れたい。（高瀬公子）

③　日本語Ⅲ

・　受講者：15名（中国13名、インドネシア１名、ペルー１名）
・　授業時間：４コマ／週　合計51コマ（大雪のため２コマ休講）
・　担当教員：＊齋藤ますみ、高瀬公子
・　コーディネーター：膽吹覚

１）教科書及び授業の目標

・　教科書：『みんなの日本語中級Ⅰ』『みんなの日本語　中級Ⅰ文法解説書』（スリーエーネットワーク）
・　中級前期レベル者を対象にし、初級から中級への橋渡しに必要な「話す・聞く」「読む・書く」の総合的な言語能力を培う。

２）方法

（１）授業

１課を３コマのペースで授業を進めた。最初の１コマはその課の文法を、次の１コマは会話を中心に、最後の１コマは読み物を読みその内容に関連したテーマで話したり書いたりした。復習として３課毎に計４回、教科書の問題を行った。漢字については『みんなの日本語初級Ⅱ　漢字』から257の漢字語をフラッシュカードにし、読みの練習を行った。途中12回の復習の時間にはプリントを使用し書かせることもした。

（２）活動

テキスト以外に４回の「活動」の時間を設けた。これは新聞記事や視聴覚教材を使い、その時々で話題性の高いトピックについて話し合った。

（３）成績評価

成績評価はセンター規定の出席率を満たすことを前提とし、期末テストで判定した。

１）評価と課題

出席率を満たした９名のうち、７名が期末試験を受けて７名とも合格した。在籍者は15名だったが、登録時点で２名を除いた全ての学生が週３日までの受講の申請をした。又、専門の授業などと重なったり論文作成で多忙のため、コース終盤は来られない学生も目立った。レベルも運用力も個人差が大きく、継続して来られないこともあって学習事項の定着面から考えると、運営的には難しいクラスであった。しかしながら学習者は皆まじめで予習復習などし、授業の復習の時間には積極的に質問をしていた。余談ではあるが、期末試験を受験した７名全員が来期の能力試験対策を希望している。全学向けの日本語クラスであるものの、今後はこういった点も視野に入

れて授業を進めていく配慮が必要と考える。　（齋藤ますみ）

④　日本語Ⅳ

・　受講者：15名（中国14名、韓国１名）
・　授業時間：4コマ／週　合計52コマ（大雪のため２コマ休講）
・　担当教員：村上洋子　敷田紀子　酢谷尚子
・　コーディネーター：山中和樹

１）教科書及び授業の目標

・　教科書：『中級を学ぼう中級中期』（スリーエーネットワーク）
・　中級中期に必要な「話す・聞く」、「読む・書く」の４つの技能を等しく伸ばし、生き生きとしたコミュニケーション能力を養成することを目標とする。

２）方法

（１）授業

４日に１課のペースで進めた。１日目にキーワードと文法、２日目に文法と本文の言葉、３日目に本文の内容と聴解、４日目に作文とプラスアルファと関連読み物を行った。

（２）活動・作文

今期中９回の活動を行い、その中で生教材として本やＣＤ、ＤＶＤを用いて現実的な出来事や文化や習慣を語彙・文型とともに学んだ。ロールプレイや発表なども積極的に行えた。作文はテキストに出てくるテーマについて時間内で考えをまとめ、わかりやすい文が書けた。

（３）成績評価

センター規定の出席率を満たすことを前提とし、その上で期末試験の結果を基にして授業態度などを考慮して、総合的に判断した。

３）評価と課題

出席率を満たした７名のうち５名が期末試験を受け、５名とも合格。うち３名が優、２名が良だった。この７名は出席率も授業態度もよく、和やかな雰囲気で、熱心に取り組めていた。しかし、日本語の授業が他の授業や研究と重なり、曜日によって出席する学生が違うため、言葉と文法だけ、または本文と聴解しかできないというような学生がいたので、今後は１日で完結するテキストを取り入れるなど、工夫が必要である。　（酢谷尚子）

７．むすび

昨年度後期に日本語能力試験対策クラスとして開講した科目が、今年度から本センターの中期目標の一環に据えられ、新たに日本語能力試験対策講座として再出発した。この新講座の概要などについては本誌別項に譲るが、全学向け日本語コースの日本語Ⅲ・Ⅳのクラスの受講生の多くが、この新講座に参加した。言い換えれば、日本語Ⅲ・Ⅳと新講座とを併修していた学生が少なからずいた。前掲の授業報告にも指摘されているが、今後は新講座との連携を十分に図る必要がある。そうすることで相互に良い結果が出るように努めたい。　（膽吹覚）

４．日本語能力試験対策講座

《前期》

①　日本語能力試験対策講座Ｎ－１クラス

・　受講者：11名（中国11）
・　授業時間：２コマ／週　総コマ数：30コマ
・　担当教員：村上洋子
・　コーディネーター：山中和樹

１）教科書及び授業の目標

・　『にほんご500問　上級』（アスク出版）、日本語能力試験1級過去問題
・　新しい日本語能力試験Ｎ－１の合格を目指し、そのための語彙力、文法力、聴解力、読解力を養う。

２）方法

（１）授業方法

教科書として選んだ『にほんご500問　上級』は、文字、語彙、文法の力をつけるための問題集なので、毎週宿題とし、授業ではその中からテストを行い、定着を図った。その他は、特定の教科書は用いず、文字語彙、文法、聴解、読解と４つの分野を過去の問題を中心に、解説しながら授業を行った。４月の初めから、週２コマの授業を行い、６月には土曜日に、２回の試験対策模擬試験と解説を行った。新しい日本語能力試験になって初めてのコースなので、試験に対する情報が少なく、手探りで進めたが、学生の出席率はよく、目標に向かってみんな努力していたので授業はやりやすかった。

（２）成績および評価

コースとしての評価はしていないが、能力試験の結果をコピーして提出する事が義務付けられている。

３）評価と課題

プレースメントテストをして、13名の学生が登録したが、授業時間の都合で最終的な受講者は11名となった。前回の12月の試験で、２級を合格したばかりの学生にとっては、30回の授業でＮ－１のレベルに達するのはかなり難しく、再履修をして、合格を目指す学生もいる。今回は旧１級の合格者も受講していて、レベル差があったが、それなりに他の学生の刺激になり、良かったと思う。模擬試験の時間をとったことで、時間配分や聴解のペースなど実感できて、最後の学生のアンケートを見ても全員が模擬試験は必要であるという意見だった。　（村上洋子）

②　日本語能力試験対策講座Ｎ－２クラス

・　受講者：８名（中国６名、韓国２名）
・　授業時間：４コマ／週　合計30コマ
・　担当教員：齋藤ますみ

・　コーディネーター：山中和樹

１）教材（以下のものより抜粋）

・　『にほんご500問　中級』（アスク出版）

・　『日本語能力試験１・２級　試験問題と解答』2008年度（凡人社）

・　『日本語総まとめ　Ｎ２　語彙編』（アスク出版）

・　『日本語総まとめ　Ｎ２　文法編』（アスク出版）

・　『日本語能力試験　Ｎ２　模試と対策』（アスク出版）

・　『日本語能力試験　Ｎ２　予想問題集』（国書刊行会）

・　『合格できる日本語能力試験　Ｎ２』（アルク）

・　『パターン別　日本語能力試験２級　徹底ドリル』（アルク）

・　『徹底分析　日本語能力試験　文字・語彙２級』（国書刊行会）

２）授業方法

コース開始前にプレイスメントテストを実施した。初日にはテストの結果を踏まえ個別オリエンテーションを行い、各自自分の能力および不得意分野を認識させた。その上でクラスでしきれない漢字、聴解については参考書・問題集を紹介したり、解答の技術を紹介したりして勉強の仕方を示し、独習を促した。

ほとんどの学生が文法を苦手としていたため、コースの前半は文法およびそれに伴う語彙を中心に授業を進めた。毎回予習を前提とし、クラスでは質問を受けた上でチェックテストを行なった。コースの後半では読解、聴解問題に力を入れた。

また、試験の２週間前と１週間前に２回の聴解を含む模擬テストを実施し、その日に解答解説を行った。

３）評価と課題

学生の予習を前提として進めたが、コースの初めはなかなか徹底されなかった。そのためチェックテストに時間がかかり、予定の学習項目をこなすことができない日もあった。しかし、コースの中盤ではだんだん慣れてきて、それが改善され、理解できないことについて授業中に活発に質問をするようになった。

前年度までの旧試験と今回初めて実施される新試験の大きな違いは、合否基準が総合得点だけの合否から、各得点区分の基準点も含まれるようになったことである。「文字・語彙・文法」「読解」「聴解」の３区分において全て基準点に達することは学生にとってかなりの負担が強いられる。短いコース期間の中で効率よく学習できるよう教師としても工夫して臨んでいきたい。　　（斎藤ますみ）

《後期》

①　日本語能力試験対策講座Ｎ－１クラス

・　受講者：11名（中国９、ドイツ１、ポルトガル１）

・　授業時間：２コマ／週　総コマ数：30コマ

・　担当教員：村上洋子

・　コーディネーター：山中和樹

1）教科書及び授業の目標

・　『にほんご500問　上級』（アスク出版）、日本語能力試験1級過去問題

・　新しい日本語能力試験Ｎ－１の合格を目指し、その為の語彙力、文法力、聴解力、読解力を養う。

2）方法

（1）授業方法

教科書として選んだ『にほんご500問　上級』は、文字、語彙、文法の力をつけるための問題集なので、毎週宿題とし、授業ではその中からテストを行い、定着を図った。文字語彙、文法、の力が不足している学生が多かったので、文字語彙、文法を中心に前半は授業を進めた。後半は過去の問題集をやりながら、聴解、読解にも取り組んだ。今期は非漢字圏の学生もいたので、文字語彙の定着に不安があったが、共に良く努力をしていたので、中国人の学生にも良い刺激になったと思う。1時間目に授業をすることで、できるだけ他の授業と重ならないようにしたが、ＰＴを受けたものの、授業があって参加できない学生もいた。

（2）成績および評価

コースとしての評価はしていないが、能力試験の結果をコピーして提出する事が義務付けられている。

3）評価と課題

９月の中旬から、週２コマの授業を行った。開始当初はまだ夏休み中で帰国している学生や、10月から新たに入学した学生を受けいれたので、出席率にばらつきがあるが、夏休みに参加した学生にはゆっくり落ち着いて勉強できてよかったと好評だった。12月の試験に備えるには、10月開始では時間的に間に合わず、文字語彙や、文法は覚えることが多いので、なるべく早く始める事ができるとよいが、夏休みのため帰国した学生や後期入学の学生をどうするかが今後の課題である。（村上洋子）

②　日本語能力試験対策講座Ｎ－２クラス

・　受講者：４名（中国）

・　授業時間：４コマ／週　合計30コマ（９月～12月）

・　担当教員：齋藤ますみ

・コーディネーター：山中和樹

1）教材（以下のものより抜粋）

・　『にほんご500問　中級』（アスク出版）

・　『日本語能力試験１・２級　試験問題と解答』2008年度（凡人社）

・　『日本語総まとめ　Ｎ２　語彙編』（アスク出版）

・　『日本語総まとめ　Ｎ２　文法編』（アスク出版）

・　『日本語能力試験　Ｎ２　模試と対策』（アスク出版）

・　『日本語能力試験　Ｎ２　予想問題集』（国書刊行会）
・　『合格できる日本語能力試験　Ｎ２』（アルク）
・　『パターン別　日本語能力試験２級　徹底ドリル』（アルク）
・　『徹底分析　日本語能力試験　文字・語彙２級』（国書刊行会）

２）授業方法

コース開始前にプレイスメントテストを実施した。初日にはテストの結果を踏まえ個別オリエンテーションを行い、各自自分の能力および不得意分野を認識させた。その上でクラスでしきれない漢字、聴解については参考書・問題集を紹介したり、解答の技術を紹介したりして勉強の仕方を示し、独習を促した。

ほとんどの学生が文法を苦手としていたため、コースの前半は文法およびそれに伴う語彙を中心に授業を進めた。毎回予習を前提とし、クラスでは質問を受けた上でチェックテストを行なった。コースの後半では読解、聴解問題に力を入れた。

また、試験の２週間前と１週間前に２回の聴解を含む模擬テストを実施し、その日に解答解説を行った。

３）評価と課題

後期のコースを希望しプレイスメントテストを受験したのは６名だった。全員が一定の点数に達し受講資格を得たが、２人が辞退し結局コースは４人で始まった。受講生の中で一人の学生が初級文法を終えていなかったため、かなりのレベル差が生じクラス運営は難しかった。

今回のコースの一番の反省点は、やはりプレイスメントテストで一定の得点を取っていれば、初級文法の学習を終えていなくてもコースに受け入れたことであろう。来期の課題としては、プレイスメントテストの見直しと出席率の向上のための開講時間の考慮、この二点が必要と考えられる。（齋藤ますみ）

《まとめ》

今年度から日本語能力試験が新しくなった。昨年度までの１級から４級までが、Ｎ－１からＮ－５の５段階に変更になった。Ｎ－１は旧１級と同等以上ということで、試験の難易度がかなり上がり、合格が難しくなるかと予想された。また、Ｎ－１、Ｎ－２クラスとも過去問題集が役立つかどうか心配であったが、受講生の努力もあり、一定の成果は得られた。（山中和樹）

５．共通教育科目・日本語日本事情科目

《概要》

2010年度、センター教員は、センター開講科目以外に、共通教育センターが開講する基礎教育科目・外国語科目としての日本語科目と、教養教育副専攻科目の日・中言語文化系及び日本語・日本文化系科目を担当した。2010年度の開講科目は以下の通りである。

《2010年度　開講科目一覧》

科目	開講時間	単位	担当教員
日本語科目			
日本語Ａ	前期火４	２	山中和樹
日本語Ｂ	後期火４	２	膽吹覚
日本語Ｃ	前期火３	２	桑原陽子
日本語Ｄ	後期火３	２	山中和樹
日本語Ｅ	前期火４	２	今尾ゆき子
日本語Ｆ	後期火４	２	今尾ゆき子
日本語Ｇ	前期火３	２	膽吹覚
日本語Ｈ	後期火３	２	桑原陽子
日・中言語文化系　　日本語・日本文化系科目			
応用日本語Ⅰ	前期月２	２	山中和樹
応用日本語Ⅱ	後期月１	２	中島清
日本の文化	前期木１	２	膽吹覚
日本事情Ａ	前期火１	２	膽吹覚
日本事情Ｂ	後期火２	２	今尾ゆき子
多文化コミュニケーションＡ	後期木１	２	山中和樹
多文化コミュニケーションＣ	前期月２	２	山中和樹

＜日本語Ａ＞

【受講生】12名（学部生11名　交換留学生１名）

【目　標】

・　擬音語・擬態語や助詞の使い分けなどに関するテーマの文章を読んで初級のまとめをし、それらを実際の作文で使用できるようにする。

【教　材】プリント教材

【方　法】

・　平均すると、大体２～３コマに1課のペースでプリント教材を読み、語句の意味や用法の確認をおこなった。

・　成績評価：中間試験（40%）、期末試験（60%）

【評価と課題】

・　この授業は短プロの中級日本語との合同授業である。この中には漢字を苦手としている非漢字圏の学生もいる。そのため、漢字の読みのプリントを全員に配布した。出席と授業態度はおおむね良好（４名は100%）だったが、学部生のうち１名はコースの前半終了あたりから出席しなくなった。正規生の中には学習意欲も特別聴講生や短プロの学生と比べると劣っている者も若干見られた。

・　正規生の内訳は中国５名、マレーシア５名、ベトナム１名であったが、中国人以外の学生も読解には特に問題はなかったようだ。交換留学生の１名は中国出身。

・　プリント教材は雑誌に掲載された記事を使用した。ふりがながついていなかったので、漢字の読みのプリントを別途配布した。

・　今期は漢字を苦手としている非漢字圏の学生に配慮したため、進度を遅くせざるを得なかった。試験問題も漢字が負担にならないように配慮した。　（山中和樹）

＜日本語Ｂ＞

【受講生】５名（正規生５名：マレーシア２名、中国２名、ベトナム１名、）

【目標】授業でのプレゼンテーションに役立てる。

【教材】プリント教材

【方法】

・　１コマで１テーマの発表とした。発表時間は前半が１分、後半が３分とした。発表後は、他の学生との日本語によるＱ＆Ａを行った。

・　テーマは「私の専門」「日本語を学ぶ理由」といった個人的な意見からはじめ、新聞の人生相談記事に対するアドバイス、日本の社会問題に対する提言へと徐々にレベルを高めていった。

・　成績および評価：期末試験（100%）

【評価と課題】

・　受講生はおおむね積極的に授業に参加しており、期末試験の結果を見る限りスピーチの能力も向上したといえる。

・　スピーチの準備を疎かにする学生はほとんどなく、学生間のＱ＆Ａも教師の予想以上に活発であった。短期留学プログラム生と合わせて10名というクラスサイズは、こうした授業には適したサイズであったことが良い結果に繋がったと思われる。
・　個々の文法的な誤りの訂正や身振りの修正など、個々の生徒にもっと丁寧な指導ができればよりよい授業になったと思われるので、この点を今後の課題としたい。　（膽吹　覚）

＜日本語Ｃ＞
【受講生】６名（正規生６）
【目標】
・　文型、語彙を拡充し、適切な表現・語彙を使って、より詳しい説明・描写ができるようになることを目指す。さらに学生生活上必要なメールの基本的な書き方を学ぶ。
【教材】教科書　教科書は指定しない。授業中にハンドアウト等を配布する。
【方法】
・　教師が用意した15回分のＶＴＲ（１回数分）について、詳しく適切に描写する練習を行う。口頭での説明練習後、筆記による語彙・文法の確認を行う。主としてペアワークによる活動を行う。
・　授業５回ごとにテストを行い（計３回　配点は各30点）、それに平常点（10点満点）を加算する。
【評価と課題】
・　授業態度は非常に良好で、課題レポートにもまじめに取り組んだ。
・　待遇表現を意識したメールの書き方、特に定型表現の使い方について学ぶ機会を設けたことは、非常によかったが、まだ不十分であると思う。次年度はさらにこのような練習を拡充させたい。　（桑原陽子）

＜日本語Ｄ＞
【受講生】５名（学部生４名、交換留学生１名）
【目　標】
・　「テ形」と連用中止の使い分け、「は」と「が」の使い分け、「のである」文の用法などを学習し、それらを実際の作文で使用できるようにする。
【教　材】プリント教材
【方　法】
・　平均すると、大体２～３コマに１課のペースでプリント教材を読み、語句の意味や用法の確認をおこなった。
・　成績評価：中間試験（20％）、期末試験（60％）、課題（20％）
【評価と課題】
・　この授業は短プロの中級日本語との合同授業である。今期は短プロの学生５名のうち、２名

が米国出身で、漢字を苦手としている。そのため、漢字の読みのプリントを全員に配布した。正規生の中には学習意欲が特別聴講生や短プロの学生と比べると劣っている者も見られた。

・　正規生の内訳は中国２名、マレーシア２名であったが、中国人以外の学生も読解には特に問題はなかった。交換留学生の１名は中国出身。

・　短プロから参加の学生のうちに非漢字圏の学生がいたので、ルビなしの本文の理解に困らないように、各課の初めに漢字の読みのプリントを配布し、漢字の読み及び意味について確認した。試験問題も漢字が負担にならないように配慮した。　（山中和樹）

＜日本語Ｅ＞

【受講生】８名（学部生２名、交換留学生６名）

【目　標】

・　さまざまなテーマの文章を読んで要約することにより、語彙力を増やすとともに読解力および文章作成力を培う。

【教　材】柿倉侑子他『日本語上級読解』（アルク）

【方　法】

・　１授業１課のペースで課題文を読み、語句の意味の確認、文章構成・内容の把握を行った。

・　毎回、テキストの課題文から選定した重要語句を用いた短文作成５題、要約文(160字程度)および感想・経験等の文章作成(160字)を宿題として課し、添削後返却した。

・　成績評価：宿題提出（50%）、期末試験（50%）

【評価と課題】

・　学部生２名、非正規学生６名（交換留学生６）、国籍は中国（５）、韓国（２）、ポルトガル（１）の構成であった。この科目は短期プログラムＡコースの「日本語上級」との合同授業で、Ａコースの学生２名（米国１、中国１）が受講した。

・　出席・授業態度・毎回の宿題提出ともに良好で、短文、要約文などの作成を通じて誤用が少なくなり、文章量も多くなった。　（今尾ゆき子）

＜日本語Ｆ＞

【受講生】６名（学部生１、交換留学生５、マレーシア１、ポルトガル１、中国４）

【目　標】

・　さまざまなテーマの文章を読んで要約して感想文を作成することにより、語彙力を増やすとともに読解力および文章作成力を培う。

【教　材】柿倉侑子他『日本語上級読解』（アルク）、読解プリント

【方　法】

・　１授業１課のペースで課題文を読み、語句の意味の確認、文章構成・内容の把握を行う。

・　毎回、テキストの課題文から選定した重要語句を用いた短文作成５題、要約文（160字程度）および感想・経験等の文章作成（160字）を宿題としてメール送付を課し、添削後返却した。他

の学生の文章を見て参考にするよい機会と考え、宿題は各自授業でも板書させて添削した。

・　成績評価：出席・宿題提出（50%）、期末試験（50%）

【評価と課題】

・　出席・授業態度は良好（皆出席：４名、１回欠席：１名、２回欠席：１名）

・　日本語力の高い漢字圏の学生４名と非漢字圏の学生２名の構成である。読解のテキストは漢字圏の学生にとっては簡単であるが、非漢字圏の学生には困難な部分もあった。しかし、短文や要約文、感想文などの作成において各学生はそれぞれの能力に応じて努力し、文章表現力が向上した。（今尾ゆき子）

＜日本語Ｇ＞

【受講生】22名（工学部13名、短プロＢコース８名、科目等履修生１名）

【目標】

・　レポートや学術論文などの論説文を読むのに必要な文法知識・構造に関する知識などを学びながら、各自の専門分野の論文を独力で読んでいくための基礎的読解力をつけることを目標とする。

【教材】『大学・大学院　留学生の日本語③論文読解編』（アルク）

【方法】

・　教科書に従って、１コマで１課ずつすすめた。本文の読解終了後に課題として感想文を書かせた。

・　成績評価：期末試験（100%）

【評価と課題】

・　受講者が24名（短プロの２名を加算）であったので、受講生を個別に丁寧に指導することが出来なかった。今後は受講者数に応じて、シラバスを変更することも必要かもしれない。（膽吹覚）

＜日本語Ｈ＞

【受講生】14名（正規生５名、非正規生９名）

【目　標】新聞記事・新書から時事問題を取り上げ、関連語彙・表現を学び効率よく読む技術を身につける。特に、予測して読む力をつけることを重視する。

【教　材】新聞記事等の生教材

【方　法】

・　新聞記事・新書を素材として使用し、具体的な読みの技術を提示して読む練習を行った。必要に応じてピアリーディングを行い、回答の是非についてはクラス内で議論を行った。読解記事の要約、書き換え等の課題を課し、書く訓練を行った。

・　レポート課題（各10点　自由提出・最大14回）のうち得点の高い10回分を評価対象とした。

【評価と課題】

・　授業態度は大変良好であった。

・　ここ数年の傾向として、受講生の日本語力の差が大きくなっている。上級クラスの授業内容のレベルを保ちながら、日本語力が不足している学生に対してどのように指導するかが課題である。（桑原陽子）

＜日本事情Ａ＞

【受講生】23名（工学部13名、短プロＢコース10名）

【目標】福井県の地理・名所・名産・偉人などの学習を通して、福井県に関する知識を醸成し、理解を深める。

【教材】『越前若狭いろはかるた』（ふくい文化研究会）

【方法】

・　受講生が２枚ずつカルタの札を選び、その札に書かれた内容について調査し、その結果を日本語でプレゼンテーションした。学生の発表後、教員による補足解説を行なった。

・　成績および評価

レポート（60%）、プレゼンテーション（２回、各20%）

【評価と課題】

・　『越前若狭いろはかるた』は膽吹が教育地域科学部教員と共同で開発した教材であるが、今回、初めて授業で使用した結果、地理・名産・名所は学生の理解を得られたが、宗教関係（永平寺・泰澄・蓮如）、歴史上の偉人（継体天皇・橘曙覧・由利公正）は理解しにくいようであった。今後の課題としたい。（膽吹覚）

＜日本事情Ｂ＞

【受講生】20名（学部生12名、交換留学生６名、短プロＡコース２名）

【目　標】日本の社会構造や文化、日本人の考え方・価値観を学ぶとともに自国の文化や価値観を再認識する。

【教　材】ハンドアウト（『日本を知る－その暮らし365日－』から抜粋）、プリントＤＶＤ：「年中行事としきたり」、ＮＨＫ録画ビデオ「ゆく年・くる年」など

【方　法】

・　ハンドアウト、ビデオ等で年中行事やしきたりについて学び、日本人の考え方を知る。

・　見学授業（福井市立郷土歴史博物館、養浩館、福井県立歴史博物館）を行い福井の歴史、風土、産業について学んだ。

・　俳句の成り立ちと形式を学んで各自６句の投句を課し、句会形式で合同評価した。

・　かるた大会（「越前・若狭いろはかるた」使用）を牧島荘にて実施。読み札の内容（福井の名所・名産等）を事前学習の後、畳の上で日本の伝統的な遊びを体験。

・　成績及び評価

レポート（国民の休日・見学・句作・かるた大会）：50%、期末試験：50%、

【評価と課題】

・　学生の授業態度は熱心で出席率も良好。特に見学授業や俳句大会・かるた大会など参加型の授業を楽しみ、レポート作成も真面目に取り組んだ。
・　「日本事情Ｂ」は「日本事情１」（受講者４名）との合同授業で、７ヵ国（中国、ベトナム、マレーシア、ラオス、ドイツ、インドネシア、Ｕ．Ｓ．Ａ．）の学生が受講した。欧米系もアジア系も一緒に俳句作りやかるた遊びなどの日本文化を体験する中で、行動様式の違いから国や文化の違いも学び、刺激を受けたとの感想が目立った。彼我の違いから自国の文化や価値観を再認識できたことは授業の目標が達成されたことであり、評価できる。　（今尾ゆき子）

＜日本の文化＞

【受講生】22名（工学部16名、日研生１名、短プロＢコース５名）
【目標】日本の伝統的な遊戯について学ぶことで、その背景にある日本文化、日本人の心性について考える。
【教材】教科書は使用しなかった。
【方法】
・　日本の伝統的遊戯――しりとり、折り紙、いろはカルタ、百人一首、将棋、囲碁、福笑い、おはじき、すごろくなど――を取り上げて、教員がその歴史、遊び方、そこに見られる文化的特徴などについてパワーポイントを使って講義したあと、受講生が実際にその遊戯を体験し、教員と学生のディスカッションを経て、最後には課題（主にその遊戯についての意見）を課し、作文を提出させた。
・成績および評価：レポート（100％）
【評価と課題】
・　学生に実際に遊戯を体験させることで、授業への参加意欲を高めることにつながったようである。アンケートによると、遊戯を通して日本・日本人を論じることに興味を抱いてくれたようであり、シラバスに記した目標はほぼ達成できたと見てよいであろう。　（膽吹覚）

＜多文化コミュニケーションＡ・異文化コミュニケーションＡ＞

【受講生】34名（正規生28名、非正規生６名）
【目　標】日本人学生と留学生との対話や質疑応答を通じて、お互いの文化について理解し、異文化との交流方法の基礎を習得する。
【教　材】教科書は指定しない。ハンドアウトを配布する。ＣＤも活用する。
【方　法】
・　各国の学生にそれぞれの国歌、祝祭日、年中行事、数、伝統的な遊び、名前のつけ方等を紹介してもらって、質問する。日本に関するものや学生の出身国以外のものは教員がハンドアウトを用意し、それについて質疑応答する。
・　①名前の付け方、②国歌、③祝祭日及び年中行事についてのレポートを項目が終わるごとに提出させた。

・　成績評価は、授業態度（積極的な参加態度）、レポート等を総合して行った。

【評価と課題】

・　名前についての資料が増えてきたので、その分、解説の時間も増えた。結果的に、今期は葬式、霊などに関する項目まで進むことができなくなった。

・　今期は日本人学生が約３分の２を占めたが、留学生の出身国が中国、マレーシアのほか、ドイツとポルトガルの出身者がいたので、バラエティーに富んだ構成になった。それぞれの国の事情を説明するとき、留学生は積極的に発言して授業に参加した学生が目立ったが、残念ながら、日本人学生からはほとんど質問も出なかった。　（山中和樹）

＜多文化コミュニケーションＣ・異文化コミュニケーションＣ＞

【受講生】38名（正規生33名、非正規生５名）

【目　標】日本人学生と留学生との対話や質疑応答を通じて、お互いの文化について理解し、異文化との交流方法の基礎を習得する。

【教　材】教科書は指定しない。ハンドアウトを配布する。ＣＤも活用する。

【方　法】

・　各国の学生にそれぞれの国歌、祝祭日、年中行事、数、伝統的な遊び、名前のつけ方等を紹介してもらって、質問する。日本に関するものや学生の出身国以外のものは教員がハンドアウトを用意し、それについて質疑応答する。

・　①名前の付け方、②国歌、③祝祭日及び年中行事、④数(数え方、吉数、凶数等)についてのレポートを項目が終わるごとに提出させた。

・　成績評価は出席、授業態度、レポート等を総合して行った。

【評価と課題】

・　今期から授業が15週確保されるようになったので、教授項目に十分な時間がとれるようになった。

今期は留学生がほとんど中国人学生になり、その他はベトナム人学生が１人だけとなった。当初、マレーシアの学生もいたが、途中から来なくなった。そのため、多様性に欠けた。

それぞれの国の事情を説明するとき、留学生は積極的に参加したものの、日本人学生は積極性に欠けた。

今期は、日本人学生と留学生を小グループに分け、自己紹介をはじめ、お互いに質問しあう時間を設けることができず、あまり交流が進まなかったのが反省点である。　（山中和樹）

＜応用日本語Ｉ＞

【受講生】25名（学部生15名、非正規生10名）

【目　標】

日本経済新聞掲載「仕事常識」を通して、日本企業における職場マナーを学ぶ。また、それを通して、現代日本の社会文化を理解する視点を養うとともに、語彙力、理解力、表現力の向

上を図る。

【教　材】日本経済新聞土曜版掲載シリーズ「仕事常識」のプリント

【方　法】

導入として、新聞記事の聴解を通して概略を把握する手法を実施した。導入後は教材の講読、内容質問等を行った。各回１つの記事を読み切り、次回にその内容に対する試験（記述試験）を実施した。試験については実施の次週に採点返却し、模範解答を配布した。

【評価と課題】

・　成績評価は期末試験（電話応対試験）、出席率、毎回の試験を総合評価して行った。３名は出席が２／３以下だったため、受験資格を失った。その他の学生はおおむね出席は良好だった。授業態度も良好だったが、学習意欲は非正規生の方が上の印象を得た。

・　資格外活動としてのアルバイトだけでなく、卒業後日本国内企業に就職する留学生の数が増えている。日本の企業文化、マナーを学ぶことにより、職場にスムーズに適応できるようさらに記事を拡充していく必要がある。

・　なるべく多くの項目を紹介しようとしたため、電話応対や名刺交換の実地練習があまりできなかった。今後は、項目を厳選して、練習にも多くの時間を割きたい。　（山中和樹）

＜応用日本語Ⅱ＞

【受講生】17名（正規生12名、非正規生５名）

【目　標】最近の代表的な恋愛テレビドラマを通して、日本の社会、精神風土を理解すると同時に、微妙な気持ちの表現方法を学ぶ。また、教科書で学んだ日本語の応用形である、短縮形、短縮表現、音便等の理解運用力を養う。

【教　材】テレビドラマ「Beautiful Life 」全11話（各45分）

【方　法】まず、音なし画面を見て、その状況を相手に伝える作業を通し、状況把握力を養う。次に、音声付画面を見て、聴解の練習をする。最後に、シナリオを配布して、理解内容、表現等を確認練習する。毎回、前回の内容に関する試験を行う。そして、実施の次週に採点返却し、模範解答を配布する。

【評価と課題】

・　毎日の試験、期末試験により綜合的評価する。全般に出席率、授業態度ともに良好であったが、４名が途中で離脱した。冬場の第１限目の授業で出席率を達成するには生活など自己管理ができないと難しい。　（中島清）

《まとめ》

日本語科目においては、概して非漢字圏の短期プログラム生の漢字能力が正規生に比べて低かったので教材の選定や授業方法に考慮を要したクラスもあった。しかしながら、一般に短期プログラム生の方が学部正規生より学習意欲が高かった。

日本語科目以外では、漢字能力や日本語能力の差は特に問題になっていない。　（山中和樹）